

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

建白書

さらに彌兵衛を支えたのは、青年時代、父の宗因に勧められて旅をし、広い地域で見聞きした数々の知恵や知識だった。

彌兵衛は、今まで習い覚えた測量の技術を使い、意宇川と剣山の測量を念入りに行った。

そして、建白書を書き終えると、身を整え神仏に手を合わせ、家族と盃を交わした。

彌兵衛は筆を執って、紙に向かった。

「命をかけて、岩山を切り抜き、もしも、この事業が叶わぬ時は、切り抜きの岩にて頭を砕き、死ぬ覚悟にて候」

と、書き、仏壇の引き出しに入れた。

彌兵衛が松江藩に自費普請の願いを申し出て、許可されたのは、宝永二年（一七〇五年）暮も押し詰まってからのことだった。

元禄十五年の大洪水から、実に二年半の歳月が過ぎていた。日吉村は、ようやく小さな家が立ち並び、人々の生活も、やっと落ち着きを取り戻そうとしていた。

彌兵衛の川普請の決意を聞いた日吉村の人々は、喜び感謝するどころか、眉をひそめ陰口をたたいた。

「周藤の旦那は、まだ懲りておられん。先々代の大旦那さんが剣山を汚して、神の怒りに触れなされたのを忘れておられるのかのう」

「竜神さまの怖さが、よく解っておられん」

「自分の身代をかけて、川普請をやると言うちよられるそうだが、藩の方に自分がいい顔をしたいだけじゃあないか」



画 高田勲

農民たちにとっては、何年も先のことを考えるよりも、今の細やかな日常の方が大切だった。

身近に見た地獄の光景を二年半の歳月は、村の人々の脳裏から拭い去ってしまった。

彌兵衛の前途は想像以上に多難だった。

そんな彌兵衛をしっかりと支え、理解していたのは、母親のサトと妻のクニだった。

宝永三年（一七〇六年）春、まだ肌寒さの残る意宇川の河原で厳かに川普請の起工式が執り行われた。

東西南北、四方に笹を立て、真新しい縄が張り巡らされた。神主が祝詞を上げ、地の神、水の神に工事の無事を祈願した。

彌兵衛は神主の祝詞を聞きながら、ここまでの長い道程と、これから先の見えない長い長い道程を心に浮かべていた。

「お祖父さま、お父上さま、どうぞ彌兵衛のこれからの道を照らして下さい。挫けてしまわぬよう、お励まし下さい」

彌兵衛は一心に祈った。

番頭の五郎太と駆けずり回って集めた人夫や資材、道具が、この日やっと起工式に間に合い、河原を賑わせた。

現場近くの河原には、いくつもの工事小屋が急いで建てられ、木を切る音や槌を振るう音が高らかに村中に響いた。